



原 明美 さん

はらあけみ／昭和17年生／大阪市在住／旧  
姓：中村／正明市4区出身／主婦

ああ、永遠に輝くあの味覚  
—ふるさとながと・こんにちには—

戦後の食糧難もそろそろ終わりを告げる昭和29年頃の話。“近松座”の前に“みち草”という飲み屋さんがあり本業の傍ら、夏にはアイスクリームを作っておられた。何故か母は他の弟妹には内緒で、夜になると時々姉と私を連れそのアイスクリームを食べさせてくれた。円筒型製造器(?)には、ほんのり黄味を帯びた甘い香りのアイスクリームが詰まっていた。本当においしかった。その日も3人で置座に座って食べていると、突然店の引き戸がガラツと開いた。妹だ、「毎日毎日踏み切りを越えてどっかへ行つてやから、なんかおかしいと思うちよつたらここへ来ちよつたほかね！」もう怒り心頭にな

達している。怪しい気配に後をつけたというのである。当時妹は小2であれからすでに半世紀も経っているが、今でも昔の想い出話に花が咲くと決まって此の話をまるで昨日の事のように話すのである。全く食べ物のうらみはコワイものだが、妹が悔しがるのも尤もで、セピア色になっている記憶の中でもあの味だけは確かに天下一品だったと思っている。



▲昭和29年9月、“共進会”で正明市4区の子供(小学生全員)が湯本をねり歩いた時の1枚

25歳の時に結婚、「主人が医院を開業しており、父親に看護婦をやるんだよと言われて嫁いできました」と継さん。「初めて怪我をした人の血を見た時には真っ青になりました。でも時が慣れさせてくれたんでしょね」とも。2人で続けてきた医院も、17年前ご主人が亡くなり閉じることとなった。現在は、みずゞ学級(高齢者大学)や老人クラブ、紫津浦句会にも参加している。「人とのつながりを大切にしたい」と継さん。「俳句は毎月自作の句を出し合い、みんなで批評し合います。誉められたり、ここはこうした方がと意見を出し合ったり、楽しいですよ」と。

「有り難う」の気持ち

—達者です—



継 美子 さん

つぐよしこ／83歳／南町区

健康の秘訣は、よく歩くことと毎朝のコップ1杯の水。食事は娘さんが健康を考え、野菜中心の料理を作ってくれる。大切にしてるのは「有り難う」の気持ち。「数年前、目と耳を悪くしてからは、特にまわりの人に気を使ってもらっています。みんなに支えられて今の私があります。感謝の気持ちで一杯です」

